



Photo : 相澤 隆

## 堀内康雄さん！燦！讚！ 文：加藤浩子(音楽評論家)

堀内康雄さんは、楽しい方である。

一度、あるカルチャーセンターで受け持っていたレクチャー&コンサートに出演していただいたことがあるのだが、教室を埋めた（定員50人ほどの空間に80名！ちかくの方が詰めかけた）受講生の方々が、1時間半の講座のあいだ、ほとんど笑いつ放しだった。

なにしろ、お話が面白いのだ。高校時代から音楽三昧の生活を送り、慶応大学を卒業後はある大食品メーカーにめでたく就職したにもかかわらず、入社したその日に「サラリーマン不適合」を悟ったという、劇的な音楽家開眼。サラリーマン道をあきらめて、以前の夢だった歌手の道に邁進、会社のひとたちの目に触れることを承知のうえで、ロビーコンサートなどでも歌っていたという、あっぱれ（失礼！）と言いたくなる開き直り。コンクールにも積極的に挑戦し、好成績を積み重ねてめでたく（！）サラリーマンをやめ、ミラノへ旅立って行った勇気。どれもこれも、『椿姫』の原題である「トラヴィアータ（＝道を外れた女）」の男性形、「トラヴィアート」とでも呼びたくなるエピソードなのに、ご本人にかかると、からりと笑ってきいてしまうから不思議だ。ひょっとしてこの明るさこそ、世界的バリトン歌手、堀内康雄を創った重要な要素だったのかもしれない。

もちろん堀内さんの実力は折り紙つきだ。今現在、真に国際的な実力を備えた、唯一の日本人イタリアオペラ歌手といっても言い過ぎではない。整ったフォームと美声（もちろん声量も十分）、そして表現力の三拍子が揃っているのである。さらに言えば、とにかく好不調の波に翻弄されがちな歌手が多いオペラ界にあって、いつでも安心して聴けるまれな存在でもある。これこそ、本当の実力というものだろう。ある演出家によると、歌手は「調子が悪いことがほとんど」だという。それをコントロールできてこそ、名歌手といえるのだ。堀内さんはその点、すでに名歌手というにふさわしいひとなのである。

堀内さんの美声で、多くのヴェルディの役柄を、そして近年はヴェリズモの名作を堪能してきた。その軌跡を考えると、喜劇オペラの頂点ともいえる『セビリヤの理髪師』はちょっと意外に思えなくもない。ところがご本人は、以前からやってみたかったけれど機会が無かったと、大いに乗り気なよう。性格的にも、喜劇は向いていそうだ。

実はヴェルディを得意とするバスやバリトンは、名コメディアンでもあることが珍しくない。大悲劇の『リゴレット』と、大喜劇の『セビリヤ・・・』の両方を得意とする、レオ・ヌッチがいい例だろう。今回、堀内さんがその仲間入りをするだろうと思うと、今から浮き浮きと待ち遠しくなってしまうのである。